古代文学会叢書　II

声の古代―古層の歌の現場から―

目　次

声の神話と文字の神話――古層モデルで古事記を読む……工　藤　　隆……1
1　神話も歌もすべてが歌だった
2　八千矛の神の「神語」―歌と語りの問題
3　美姑イ族の創世神話「勒俄特依」
4　ウケヒ伝承を復元する
5　〔三人称の地の文的な歌＋直接話法の会話（歌）〕
6　〔一人称と二人称で相手へ話しかける直接話法の歌〕
7　〔三人称の地の文としての散文＋歌〕
歌垣の歌の論理――中国少数民族白族の歌垣を参考に――……岡　部　隆　志……68
一　白族文化と日本の文化

二　白族の歌垣文化
三　実際の歌の掛け合いとは
四　白族の歌垣の掛け合いの論理
五　協調と対立

モソ人の歌掛けと万葉和歌……遠藤耕太郎……113
——古代和歌における比喩表現の生態論的考察——
はじめに
一、モソ人母系社会の恋愛観と、そこから逸脱する個的感情
二、歌掛けの流れ
三、比喩表現による歌掛けの持続
四、前歌の認識＝世界を敷衍・拡大する連結（万葉和歌の古代的側面1）
五、前歌の認識＝世界を破壊・更新する連結（万葉和歌の古代的側面2）
六、前歌の認識＝世界を規定する連結（万葉和歌の古代的側面3）
七、おわりに

坂の向こう——壮族の歌墟と日本の歌垣——……手塚恵子……170
一　風土記と地理書
二　雷王林
三　自坂已東諸国男女
四　わからない歌
五　中国の歌謡資料
六　広西壮族自治区
七　「壮族民歌述略」
八　『壮族歌謡概論』
九　各地域の山歌
十　旋律圏の意味するもの
十一　万葉集から

死霊の歌——ヤミ族の掛け合い歌——……皆川隆一……225

（一）　対立構造再説
（二）　南東の風
（三）　危険な歌
（四）　死霊の歌
奄美の呪歌と古代文学……真下　厚……269
はじめに
一　奄美呪歌の世界
二　古代呪言の世界
三　古代呪歌の世界
おわりに
あとがき……314

声の神話と文字の神話

——古層モデルで古事記を読む

工藤　隆

1　神話も歌もすべてが歌だった

文学研究の対象は、基本的に、文字で書かれた作品の内側に限定される。そして文学史は、基本的に、その文字で書かれた作品の表現様式の継承と変遷を追うことで成り立つ。しかし、『古事記』だけは、日本文学史の冒頭の作品であるがゆえに、こういった原則を適用するのが極めて困難な作品として位置づけられる。

その困難さの第一は、参照したり比較したりする『古事記』以前に文字で書かれた書物（作品）が、日本国内のものとしては皆無だという点にある。『古事記』以前には、刀剣など古墳の副葬品に刻まれた短い文章や、六、七〇〇年代の遺跡から発見される木簡の短いメモ的文章などがあるだけだ。『古事記』よりあとだが同時代の『日本書紀』『万葉集』『風土記』は、参照資料として援用はできるにしても、いずれも『古事記』と同じく、国家中枢部や地方政庁における文字（漢字）

恋愛を許容しながら恋愛の過剰さを融和し得るのである。

むろん、いつもそんなにうまくいくわけではないだろう。男女は時に暴走し心中に至ることもあったと思われる。公共性を超えて実はわれわれは生きている。だから、そういう過剰な面を歌がまた抱え込んでいる、ということを否定はしない。が、歌の過剰さは、恋愛が社会に対して持つ過剰さとは別の問題である。言うなら、それは「文学」の問題だ。本稿では歌垣の歌から「文学」を論じる余裕はない。白族の歌垣の歌から「文学」を見いだし得る力がまだないからである。ただ、ここで論じている歌垣の歌の論理は、「文学」の問題につながるのではないかとは思っている。なぜなら、「文学」は恋愛や祭りの過剰さから言語が醒めたときに生まれると考えるからだ。本稿で論じている歌の論理とは、その醒め方の問題である。

歌垣での歌は、男女を歌垣の場に閉じこめ同時に歌垣の場から社会へと開いてしまう。その祝祭的な祭りに男女を転移させてしまうのではない。少なくとも、そのことは、白族の歌垣の歌の掛け合いから見えてきた。そのような歌の論理を「協調と対立」として見てきたが、その論理は、古代日本の歌垣においてもあてはまると考えるのである。

注・厳密に言えば「歌垣」は日本古代の歌の掛け合いを指す言葉であるが、現在、歌の掛け合い自体や歌を掛け合う「まつり」を指す広義の用語として一般的に用いられている。白族の歌の掛け合いについては、白族の側にそういった適当な用語がないので、本稿では、白族の歌の掛け合いも「歌垣」と呼ぶことにする。

モソ人の歌掛けと万葉和歌

——古代和歌における比喩表現の生態論的考察——

遠藤耕太郎

はじめに

モソ人は中国西南部、雲南省と四川省の境界域に暮らす人口四万人弱の少数民族である。本論はまず、筆者が一九九八年から二〇〇〇年にわたり、雲南省寧蒗県永寧郷ワラビ村、四川省木里県屋脚郷リジャズ村にて断続的に行ったフィールドワークで得た口誦による歌掛け資料の分析を行う。その上で、例えば序歌のように比喩部分にかなりの重心をおく、その意味で近代的詩歌観からすれば異質な万葉和歌の特質（無論それは古代和歌の特質でもある）について、それが口誦の歌掛けの技術に根ざしたものであることを述べる。

筆者は現代のモソ人の歌文化と古代日本の歌文化が、歴史的に直接関係していると考えているわけではない。にもかかわらず、比較によるこうした方法を有効と考えるのは、それが古代和歌の特質を、口誦をも含めた詩歌という普遍性のレベルで相対化するという大きな課題の一部分に